

これからはコンテンツよりも ノウハウが重要

株式会社五藤光学研究所

代表取締役社長

五藤 信隆

のごとう のぶたか



1989年慶應義塾大学理工学部機械工学科卒業後、3年間の三菱銀行(現三菱東京UFJ銀行)勤務を経て、1992年株式会社五藤光学研究所入社。取締役、専務取締役を経て2003年7月より代表取締役社長。

経済協力開発機構(OECD)が、二〇〇〇年から三年ごとに実施している、学習到達度調査(PISA)の、二〇〇六年の調査結果が発表された。日本は二〇〇〇年と二〇〇三年の調査で二位だった「科学的リテラシー」が六位に転落した。加盟国平均を五〇〇点に換算すると、日本は五三一点で、トップのフィンランドに比べると三二点も下回っている。次世代の科学技術を支える子どもたちの科学力低下が心配だ。

私どもは、天体望遠鏡やプラネタリウムなどの天文機器を製造販売している会社だが、早くからコンテンツの重要性を認識し、一九八一年に社内プラネタリウムで放映するコンテンツを制作するソフト開発課を設置し、毎年二〇〇作品以上のコンテンツを全国のプラネタリウム館に提供してきた。一九九八年一二月、一〇年ぶりに小・中学校の学習指導要領が改訂され、児童に生きる力を育むことを目指し、自ら学び自ら考える力の育成を旗印に、小・中学校での

理科教育などの時間が大幅に削減され、代わって総合的な学習の時間が新たに設けられた。これは、地域や学校、生徒の実態に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものであり、これによって、地域の自然、人材、行事や公共施設の積極的な活用が求められるようになった。従って、地域の博物館や科学館、プラネタリウム館などの果たす役割がこれまで以上に重要視されるようになった。

私は、二〇〇三年五月に代表取締役社長に就任したが、プラネタリウム館に子どもたちが学習するコンテンツを供給するよりも、これからは、子どもたちにどのように学んでもらえばより学習効果がるか、というノウハウを供給する方が重要だと思うようになった。そこで、その年の九月に改正地方自治法の施行により、地方自治体の「公の施設」の管理運営に指定管理者制度が導入された時、積極的にプラネタリウム

館の管理運営に乗り出すことにした。現在、北九州市立児童文化科学館と新潟県立自然科学館、新・仙台市天文台のプラネタリウムの管理運営を受託している。

また、学校で手軽に利用できるインターネット望遠鏡を、母校である慶應義塾大学と共同で開発する際に、ハードだけではなく、それを使った教育カリキュラムも同時に開発することにした。現在、このインターネット望遠鏡はまだ開発の途上だが、私どもの会社の屋上と慶應義塾大学ニューヨーク学院に設置し、同大学の総合教育セミナーで、学生たちが木星の衛星の位置観測を行い、その結果を解析して木星本体の質量を算出するという試みを行っている。今後、もっと多くの場所にインターネット望遠鏡を設置し、小学生や中学生にも使ってもらい、科学する楽しさを体験してもらいたいと思っている。

次号は、慶應義塾大学理工学部物理情報工学科教授、伊藤公平氏にお願いします。



(敬称略) 小長啓一→野々内隆→根来泰周→石弘光→武藤敏郎→高橋温→増田寛也→西澤潤一→内田盛也→中原恒雄→今井敬→室伏稔→上島重二→西室泰三→依田巽→重延浩→吉村作治→中川武→池内克史→中島秀之→元村有希子→石倉洋子→内永ゆか子→秋池玲子→富山和彦→五藤信隆

※本コーナーは、弊会ホームページでもご覧頂けます。